

土製耳飾の形態分類による遺跡間関係の把握

— 縄文時代後・晩期の群馬県域と長野県域の事例 —

Classification of Clay Ear Ornament Forms and Designs Reveals Networks among Related Sites
— Cases of Gunma and Nagano Prefectures in the Late and Final Jomon Period —

松原 奈々 MATSUBARA Nana

要 旨

土製耳飾は縄文時代後・晩期の関東・中部高地の遺跡で大量に出土するが、地域間関係の検討が少ない。そこで、本研究では群馬県域・長野県域の「地域差」に着目し、両地域の影響方向や遺跡間関係の把握、さらに系列ごとの直径と数量の割合を検討し、年齢による付け替えと集団ごとの系列の組成の把握を行った。

まず、「内面刻目帯耳飾」は、長野県エリ穴遺跡で大量に出土する一方、群馬県域でも散見されるが変遷の初期段階がみられないことから、長野県域から群馬県域へ影響を与えたと考えられる。また、「一単位系列」耳飾は従来、長野県域から群馬県域への一方方向の影響が指摘されていたが(角田2021)、土製耳飾の周縁部の細分と地理的分布から、両地域間の相互の影響関係が明らかとなった。

次に、群馬県唐堀遺跡における土製耳飾の系列ごとの直径サイズと数量の割合から、主体・客体の検討を行った。そして、唐堀遺跡で数量が主体的な系列は唐堀遺跡の集団、客体的な系列は他から移入した集団が使用したと考えた。また、一つの集団で複数の系列の土製耳飾をもち、集団によって使用する系列が異なり、なおかつ集団内において、年齢ごとに異なる系列への付け替えが行われていた可能性が高い。

キーワード：土製耳飾 系列 地域差 内面刻目帯耳飾 一単位系列 集団の違い 付け替え 系列の組成

1. 研究の目的

縄文時代の土製耳飾は、現在のピアスのように耳たぶに孔を開けてはめ込む用途であり、そのサイズや形態・文様が多様に展開することから、通過儀礼や年齢階梯など単なるアクセサリだけでなく、社会的機能を有した装身具であったとされる(設楽1995,2008,吉田2003)。

これまでの土製耳飾研究は、主に縄文時代後期から晩期の、関東・中部高地を中心とした遺跡で大量に出土することから、これらの形態・文様の分類が行われてきた。

一方、地域間関係の研究は少ないため、小地域での検討を重ねていくことで、複雑な土製耳飾文化について議論できると考える。実際、長野県エリ穴遺跡で特有とされる土製耳飾の一群が群馬県域の遺跡でも散見されることや、集団の違いを示す可能性がある「系列」(角田2000)の細分によって遺跡間関係の把握が可能である。

よって、本研究では、縄文時代後・晩期に土製耳飾の出土量が激増する関東・中部高地の中でも、群馬県域・長野県域

の「地域差」に着目し、両地域における影響関係、また、群馬県唐堀遺跡の系列ごとのサイズの分析から、年齢による付け替えと集団ごとの系列の組成を把握することを目的とする。

2. 分析対象と方法

2-1. 分析対象

群馬県域では、唐堀遺跡を中心に、利根川水系の河川付近に位置する石川原遺跡、矢瀬遺跡、茅野遺跡とする。

長野県域においては、エリ穴遺跡を中心とした松本盆地周辺と南信地方の中村中平遺跡とする(図1)。

2-2. 分析方法

まず群馬県唐堀遺跡の土製耳飾を角田祥子の「系列」(角田2000,2021)に従い、報告書に未掲載の遺物を含めて分類を行った。系列とは、「共通の雰囲気」(角田2000)を有する土製耳飾であり、複数の型式の群を大きく括るものである(表1)。

土製耳飾の各部位の名称は図2のとおりである。特に、分析で重要な「内面刻目帯」は、内側に稜をもつ張り出し部を設け、稜の上あるいは中央孔の縁辺に刻目を施す部分を指す。また、「肩部文様帯」とは、表面部の縁が外傾し、面取り状に作り出された部分に、玉抱き三叉文や三叉文、刻目が施される。なお、赤彩や胎土の質など報告書のみでは判断できないものは実見した。

次に、系列分類の結果をもとに、「内面刻目帯」のみをもつ土製耳飾と「一単位系列」耳飾の周縁部の細分を行い、その地域差を分布図で示す。併せて、唐堀遺跡における土製耳飾の各系列のサイズと数量の割合を算出し、主体・客体の検討を行った。

3. 「内面刻目帯耳飾」の検討

3-1. 長野県エリ穴遺跡での変遷

エリ穴遺跡には、内面刻目帯のみを有する土製耳飾が99点まとまってみられる(図3)。その特徴は、3~4cm台の中形品にまとまり、胎土は緻密で赤彩を施すものが多い。加えて、中央孔を有し、その稜の上や縁辺に刻目が施される。これらの土製耳飾は、エリ穴遺跡においてサイズに強い共通性がみられる。また、他遺跡では出土量が限られてくるために「最もエリ穴らしい耳飾」(百瀬2018)と報告されている。本研究では、「内面刻目帯耳飾」と称し、検討を進めたい。

内面刻目帯耳飾の各部位および断面形状の呼称は、百瀬(2018)の変遷案にしたがう。百瀬によると、内面刻目帯耳飾は中央孔の拡大によって刻目の位置が変化していくため、その変遷は断面形状で追うことができる。また、出現から衰退まで11段階の変遷をたどる(図4)。

この刻目の位置は、変遷の過程で二分することができる。まず、第3~4段階目では刻目が中央孔の稜の上に施されるのに対し(図3-1~5)、第5段階以降になると中央孔の縁辺に施される(図3-6~12)。これは、第3~4段階目は第5段階目と比べ中央孔が小さいが、第5段階以降に中央孔の拡大によって内面刻目帯が縮小した結果、刻目が中央孔の縁辺に追いやられる。よって、刻目が稜の上に施されるものは第4段階以前、刻目が中央孔の縁辺に施されるものは第5段階以降と大別可能である。

エリ穴遺跡では、第6段階以降に内面刻目帯耳飾の比重が大きくなり、特に第8~11段階は大多数を占める。なお、長野県における内面刻目帯耳飾は、変遷の第2段階目から確認

でき、深町遺跡、宮崎遺跡、下前沖遺跡の各遺跡で1点ずつ、中村中平遺跡で2点みられる(図3-3)。

3-2. 群馬県域の内面刻目帯耳飾

以上を踏まえ、まず、群馬県域における内面刻目帯耳飾の判別と変遷時期の把握を行った。

唐堀遺跡における内面刻目帯をもつ土製耳飾は、報告書掲載で2点確認できる(図5)。図5-1は内面刻目帯の周囲を陰刻で施された三叉文が囲み、断面形状は三角形に近い形態をもつが、エリ穴遺跡特有の内面刻目帯耳飾とは様相が異なる。

群馬県域では、刻目が中央孔の稜の上に施される第4段階相当のものが矢瀬遺跡と石川原遺跡で各1点ずつ(図6-1~2)、第5段階に相当するのは4点あるほか(図6-3~6)、第6段階以降に該当する内面刻目帯耳飾が多く確認できる(図6-7~12)。

つまり、エリ穴遺跡特有とされる内面刻目帯耳飾は、変遷の初期段階には長野県域に留まっていたが、群馬県域へは特に第6段階目以降に影響を与えている。

4. 一単位系列耳飾の検討

4-1. 一単位系列耳飾の周縁部の細分

これまで検討を行ってきた内面刻目帯耳飾は、一単位系列と深い関わりを有する。内面刻目帯耳飾の変遷案を提示した百瀬(2018)によると、後期と晩期の境とされる変遷第4段階目に、内面刻目帯を維持しつつ、外周帯の一部に玉抱き三叉文や入組文などの単位文が導入される(図7)。これは、角田(2000)の系列分類上、一単位系列とされる土製耳飾である。

角田は一単位系列の地域差について、茅野遺跡報告書で整理している。土製耳飾の加飾法である肩部文様帯(図2)は、花卉系列や一単位系列の精製品に用いられるものであり、周縁部の面取りした部分に、玉抱き三叉文や三叉文を施す。一単位系列に用いられるこの肩部文様帯は、茅野遺跡や矢瀬遺跡など群馬県域でみられる一方、長野県エリ穴遺跡や新潟県籠峰遺跡ではみられず、埼玉県高井東遺跡や赤城遺跡でも各1点と少ない。つまり、肩部文様帯が一単位系列に用いられるのは群馬県域の特徴である。また、一単位系列の周縁部で、主要文様の近くに部分的に刻目を施すものが長野県エリ穴遺跡の一単位系列の精製品に多用され(図8(1))

7~11)、これと同様の加飾法が、茅野遺跡や矢瀬遺跡、高井東遺跡で散見される(図8(1)3~6)。このことから、部分的な刻目は、長野県エリ穴遺跡から群馬県域へ影響を及ぼしたことを指摘した(角田2021)。

以上、2点の指摘を踏まえ一単位系列耳飾の周縁部に着目すると、「Ⅰ~Ⅲ：採用される文様」と「a~b：施される範囲」の2要素の複合から分類を行うことが可能である(図9)。

〈採用される文様〉

Ⅰ類：刻目のみ

Ⅱ類：玉抱き三叉文のみ

Ⅲ類：刻目と玉抱き三叉文のセット

〈施される範囲〉

a類：周縁部に全周する

b類：文様が一部に施される(b：主要文様と同範囲に収まる、b'：主要文様よりも短い範囲)

つまり、群馬県域で特徴的な一単位系列の肩部文様帯に玉抱き三叉文や刻目をもつものはⅡ・Ⅲ類、長野県エリ穴遺跡で多くみられるような刻目のみが一部に施されるものはⅠb群である。

4-2. 群馬県域・長野県域の地域差

以上の分類をもとに、群馬県域・長野県域における一単位系耳飾の周縁部の細分を分布で示した(図10)。

群馬県域では各遺跡に必ず1点は肩部文様帯に玉抱き三叉文を施すⅡ・Ⅲ類がある。一方、長野県域においては深町遺跡のみでⅡb群が1点確認される(図8(2)-17)。

さらに地域差が顕著になったのは、周縁部の一部に刻目を施すⅠb群である。長野県エリ穴遺跡では、主要文様の玉抱き三叉文と同範囲に刻目が収まるのに対し(図8(1)-7~11)、群馬県茅野遺跡と矢瀬遺跡では、これよりも短い範囲で刻目が施される(図8(1)-3~5)。よって、前者をⅠb、後者をⅠb'とする。その数量をみると、長野県域ではⅠb群がエリ穴遺跡で34点、深町遺跡と宮崎遺跡で各1点、中村中平遺跡で2点確認できるが(図8(2)12~15)、これらの遺跡でⅠb'群はみられない。一方、群馬県域ではⅠb群が唐堀遺跡の報告書未掲載遺物で2点、石川原遺跡で1点みられ(図8(1)-6)、Ⅰb'群は矢瀬遺跡で2点、茅野遺跡で1点と利根川流域でのみ確認できる(図8(1)-3~5)。

つまり、Ⅱ・Ⅲ類は利根川流域から東信地方へという影響方向に対し、Ⅰb群はエリ穴遺跡を中心とした松本盆地周

辺から利根川流域に影響した。これまで、一単位系列耳飾は長野県域から群馬県域への影響が示唆されてきたが、群馬県域から長野県域への影響方向も考えられ、両地域での相互影響が明らかとなった。

5. 唐堀遺跡の系列ごとの直径の分析による付け替えと集団ごとの組成

5-1. 系列が示す集団の違い

続いて、群馬県唐堀遺跡の土製耳飾の系列ごとのサイズと数量の割合から、主体・客体の検討をおこなった(図11)。

土製耳飾は、成長に合わせて大きなサイズへ付け替えていたとされ、年齢階梯との関係性が指摘されている(渡辺1973)。そのサイズから、金城・宮尾(1996)は1~2cmの小形品と3~6cmの中形品の2段階に数のピークを見出し、それぞれを「成人儀礼」、「婚姻儀礼」と想定した。

唐堀遺跡の系列ごとの直径サイズをみると、1cm台において、無文と小形有文系列が多く、2~3cm台は花卉系列と円文系列、4cm台は瘤系列の丸瘤タイプが多い。また、彫り込み系列や車輪系列、瘤系列の単位文瘤タイプは5~6cm台にピークがみられ、7cm以上も該当する。

よって、2cm台に花卉系列と円文系列、5cm台に彫り込み系列と瘤系列の単位文瘤タイプが併存するように、一サイズに複数の系列が重なる。これに関し百瀬(1979)は、「類型を異にしながらも同一の径をもつものは、相互に着け換えが可能」であること、また、各集落内の形態の差は、異なる集団の存在があったと指摘した。加えて設楽(2021)は、集団間の潤滑油として「共同の儀礼」があり、その際に他集団との識別を図るために、土製耳飾が用いられたと想定している。このことから、一サイズに複数の系列が重なる理由は、集団の違いがあった可能性が高い。

そこで、唐堀遺跡(報告書未掲載も含む)と長野県エリ穴遺跡の土製耳飾の系列の多寡を検討した(表2)。唐堀遺跡では、花卉系列が103点と主体的であり、円文系列の8点は客体的となる。一方、エリ穴遺跡では、円文系列と瘤系列の単位文瘤タイプが大多数を占める。

つまり、唐堀遺跡で主体的な系列は唐堀遺跡の集団、そして、客体的な系列は他からの集団が使用したものと識別できると考える。

5-2. 系列間の「付け替え」

さらに、図11で示した系列ごとのサイズのピークと表2の系列ごとの多寡の検討を踏まえると、唐堀遺跡の主体的・客体的な系列間において、それぞれで異なる系列への「付け替え」があった可能性がある(図12)。

唐堀遺跡の各系列の内訳をみていくと、小形有文系列は0.8cmが1点、1cm台が12点、2cm台は5点であり、1cm台が主体的である一方、2cm台が減少する。花卉系列は、小形有文系列が減少した2cm台を補うように5点みられ、次の3cm台が3点と減少する。また、瘤系列丸瘤タイプは、花卉系列が減少する3cm台で3点、4cm台が4点と数量的にあまり差がないが、4cm台の空白を補っていると考えられる。一方、円文系列の2~3cm台は8点であり、大形品の傾向がある単位文瘤タイプは5cm台が2点、6cm台が3点、7cm台が2点という結果である。

これらの検討を踏まえると、唐堀遺跡の集団は、0.8~1cm台の小形有文系列あるいは無文から、2cm台の花弁系列を経て、3~4cm台の瘤系列の丸瘤タイプ、そして、5cm以上の彫り込み系列という付け替えを想定できる。一方、他からの集団は、小形有文系列や無文から2~3cm台の円文系列、5~6cm台の瘤系列の単位文瘤タイプへの連続性が考えられる。

つまり、一つの集団で年齢ごとに付け替えるサイズの異なる複数の系列の土製耳飾を有し、集団によって使用する系列の組み合わせが異なっていたと言える。

6. 結論

本研究では、内面刻目帯耳飾と一単位系列耳飾の周縁部の細分、さらには系列ごとのサイズの検討を行った。

内面刻目帯耳飾は、長野県エリ穴遺跡で多くみられる一方、群馬県域では変遷の初期段階がみられないことから、長野県域から群馬県域へ影響を及ぼした。また、一単位系列耳飾は、これまで長野県域から群馬県域への影響方向が指摘されていたが、周縁部の細部と地理的分布により、両地域における相互の影響関係が明らかとなった。さらに、唐堀遺跡における系列ごとの直径サイズと数量の割合から、集団内で年齢階梯に合わせた異なる系列への付け替え、なおかつ集団ごとに用いる系列の組成が異なっていた可能性を指摘した。

このような地域間関係について、土器型式の共有関係から遺跡同士のつながりを可視化した今福(2008)の手法を土製耳飾に応用すると、その多くがエリ穴遺跡との関係をう

かがえるものの、周辺遺跡同士のつながりは不明瞭である(図13)。その広がりには同心円状に広がるのではなく、遺跡同士が1対1で関係性をもち、独自の複雑なネットワークが垣間見える。このような遺跡間関係の実態把握について、遺跡特有の文様形態や製作技術、胎土の観察により、婚姻や交易・交換など様々な考察がなされてきた。吉田(2004,2006)は、花卉系列の2~3cm台の「大宮台地型」を内部文様で分類し、その分布から群馬県域・栃木県域を主要とする「通婚圏」の可能性を指摘した。

土製耳飾の変遷については、百瀬(2023)が静岡県清水天王山遺跡の資料から、最盛期の時間幅を捉えたように、遺跡ごとかつ層位的な根拠を深め、確実な変遷を明らかにする必要がある。モノからヒトの移動を復元するためには、他の遺物を含めた検討も今後行っていきたい。

参考文献

- 今福利恵 2008「土器型式属性の共有関係」小杉康・谷口康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学7 土器を読み取る—縄文土器の情報—』同成社 pp.192-204
- 金城南海子・宮尾亨 1996「土製耳飾の直径」『國學院大學考古学資料館紀要12』國學院大學考古学資料館 pp.49-88
- 関口博幸 2022「第4章縄文時代の遺構と遺物 第2節 堅穴・堅穴建物」『唐堀遺跡(2)—縄文時代編—第1分冊 本文・遺構図版編 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.34-36
- 関口博幸 2022「第5章 調査成果 第11節 唐堀遺跡の土製耳飾」『唐堀遺跡(2)—縄文時代編—第1分冊 本文・遺構図版編 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.391-412
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021『石川原遺跡(3)縄文時代編 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第77集』
- 小林達雄 2008「縄文土器の様式と型式と形式」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション pp.2-12
- 設楽博巳 1995「土製耳飾」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣 pp.206-217
- 設楽博巳 2008「1、くらしの中の儀礼 ③装身の儀礼的性格」
- 設楽博巳・藤尾慎一郎・松本武彦『弥生時代の考古学7儀礼と権力』同成社 pp.46-57
- 設楽博巳 2021「縄文人はなぜ巨大な耳飾りをつけたのか」『顔の考古学 異形の精神史』吉川弘文 pp.132-146

- 谷口康浩 2008「親族組織・出自集団」小杉康・谷口康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学10 人と社会人骨情報と社会組織』同成社 pp.115-132
- 月夜野町教育委員会 2005『上組北部遺跡群Ⅱ 矢瀬遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 上組北部地区改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 角田祥子 2000「土製耳飾り 観察の視点」『東国史論 第15号』群馬考古学研究会 pp.13-26
- 角田祥子 2021「第2節 土製耳飾り」『史跡茅野遺跡 圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書(二)遺物編』榛東村教育委員会 pp.58-89
- 角田祥子 2021「第4章 考察編 茅野遺跡出土の土製耳飾りについて」『史跡茅野遺跡 圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書(二)遺物編』榛東村教育委員会 pp. 198-206
- 長野県飯田市教育委員会 1994『中村中平遺跡 土地改良総合整備事業に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 長野市教育委員会 1988『宮崎遺跡 - 長原地区団地営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書 -』
- 野沢温泉村教育委員会 1985『岡ノ峯遺跡第2・3次発掘調査報告書 岡ノ峯』
- 松本市教育委員会 2018『エリ穴遺跡 - 発掘調査報告書 - 遺物編1 第3分冊』
- 丸子町教育委員会 1979『長野県小県郡丸子町深町遺跡緊急発掘調査概報』
- 百瀬長秀 1979「土製耳飾りに関する諸問題 - その最盛期の諸相を中心に - 」『信濃 第31巻第4号』信濃史学会 pp.316-332
- 百瀬長秀 2018「第Ⅵ章 縄文時代の遺物 第1節 土製品」『エリ穴遺跡 - 発掘調査報告書 - 遺物編1 第3分冊』松本市 pp.1-178
- 百瀬長秀2023「土製耳飾り - 最盛期の甲信地域 - 」根岸洋・設楽博己編『季刊考古学・別冊40 縄文時代の終焉』pp.87-90
- 吉田泰幸 2003「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告 No.19』名古屋大学博物館 pp.29-54
- 吉田泰幸 2004「土製栓状耳飾の地理的分布と通婚圏」『長野考古学会誌 105』長野県考古学会 pp.34-50
- 吉田泰幸 2006「土製耳飾の装身原理」小杉康・谷口康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学 10』pp.180-193
- 渡辺誠 1973「装身具の変遷」『古代史発掘2 縄文土器と貝塚』講談社 pp.147-151

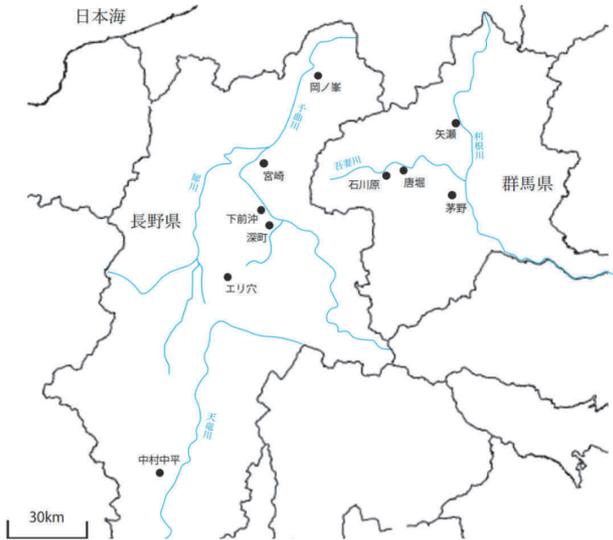


図1 対象遺跡分布図

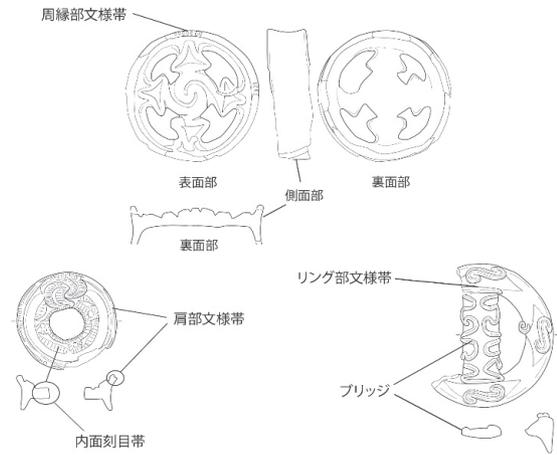


図2 土製耳飾の各部位の名称

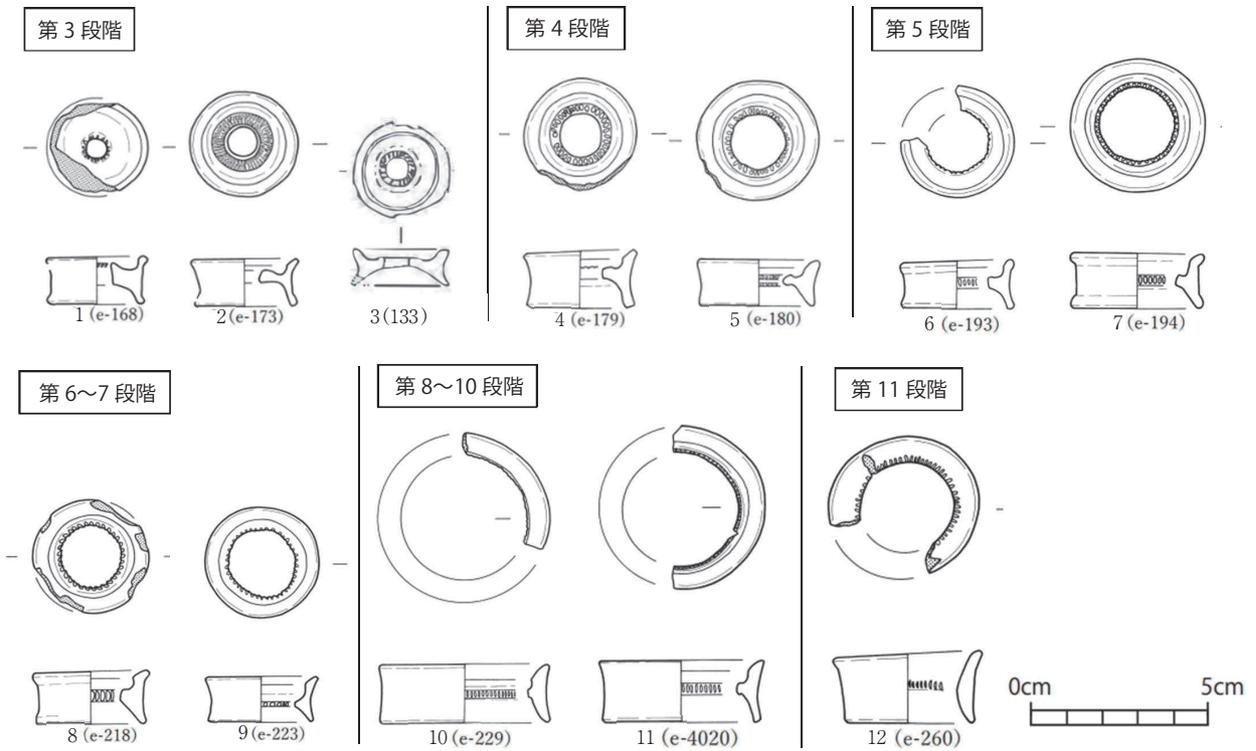


図3 内面刻目帯耳飾 1~2,4~12: 長野県エリ穴遺跡、3: 同宮崎遺跡 (縮尺2分の1) ()内は報告書番号

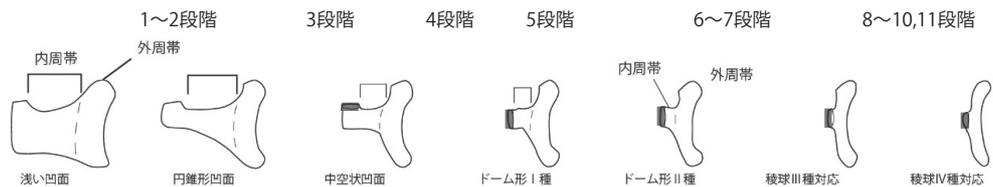


図4 内面刻目帯耳飾の断面変遷模式図 (百瀬2018)

※段階、「内周帯」と「外周帯」、刻目が施される部分(黒線)を補足

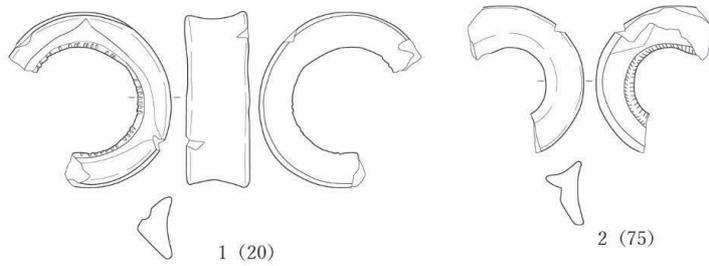


図5 唐堀遺跡の内面刻目帯をもつ土製耳飾

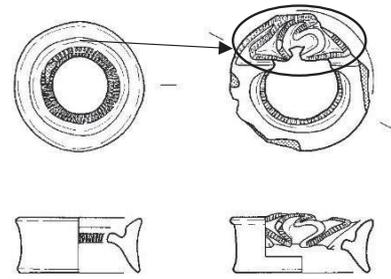


図7 内面刻目帯耳飾から一単位系列耳飾への変遷

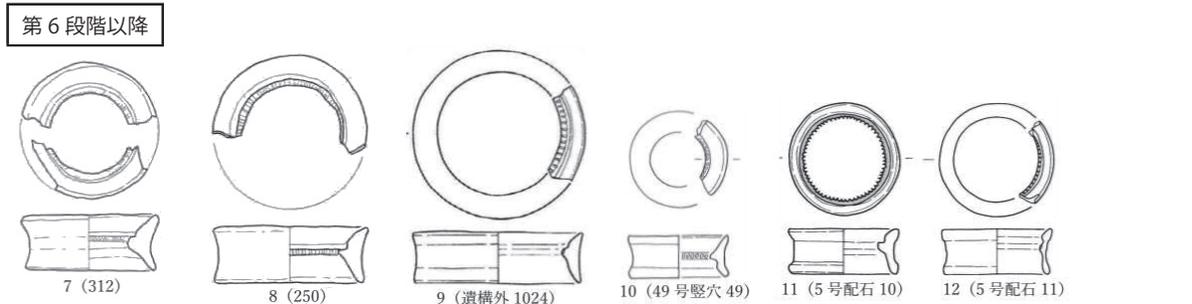
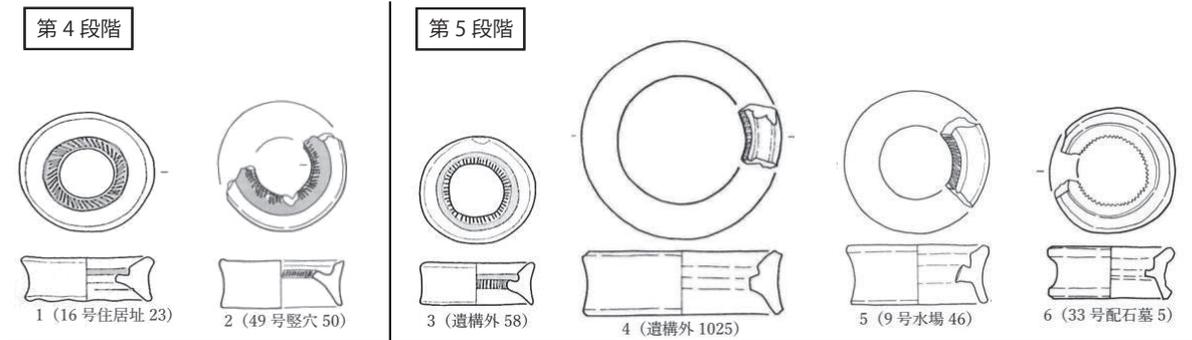


図6 群馬県内の内面刻目帯耳飾 1,3: 矢瀬, 2,4~6,9~12: 石川原, 7~8: 茅野 (縮尺2分の1) ()内は報告書番号

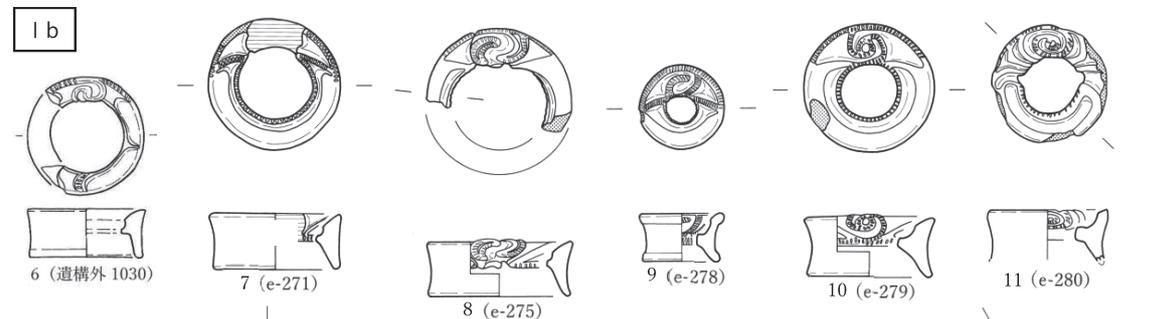
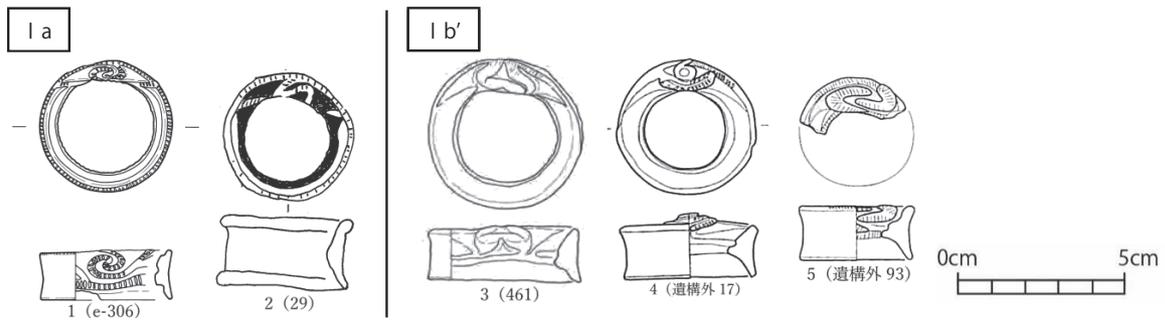


図8 一単位系列耳飾の周縁部の刻目種別(1) 1,7~11: 長野県エリ穴, 2: 同岡ノ峯, 群馬県茅野, 4~5: 同矢瀬, 6: 同石川原 (縮尺2分の1) ()内は報告書番号

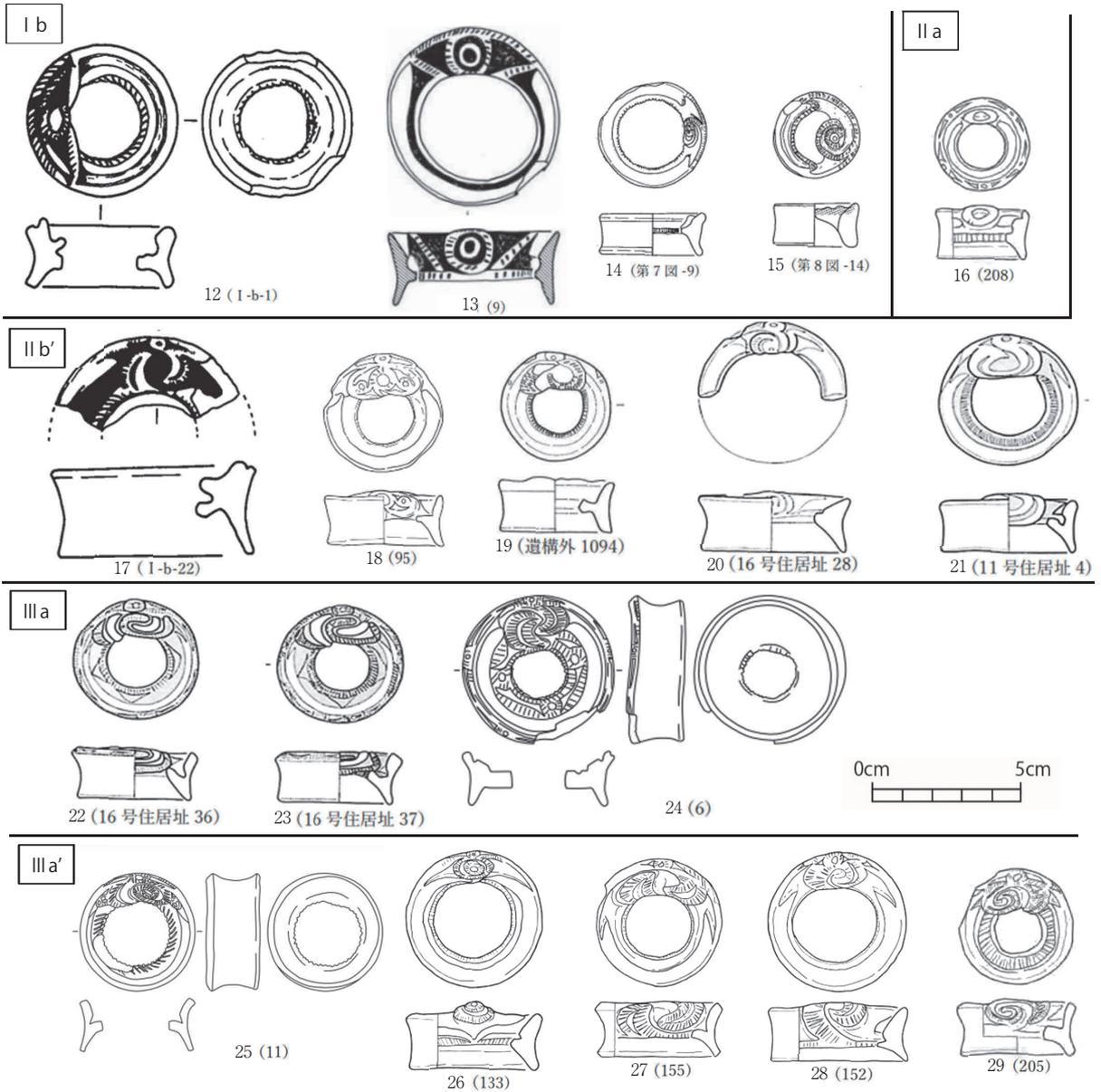


図8 一単位系列耳飾の周縁部の刻目種別(2) 12,17:長野県深町、13:同宮崎、14~15:同中村中平、16,18,26~29:群馬県茅野、19:同石川原、20~23:同矢瀬、24~25:同唐堀 (縮尺2分の1) ()内は報告書番号

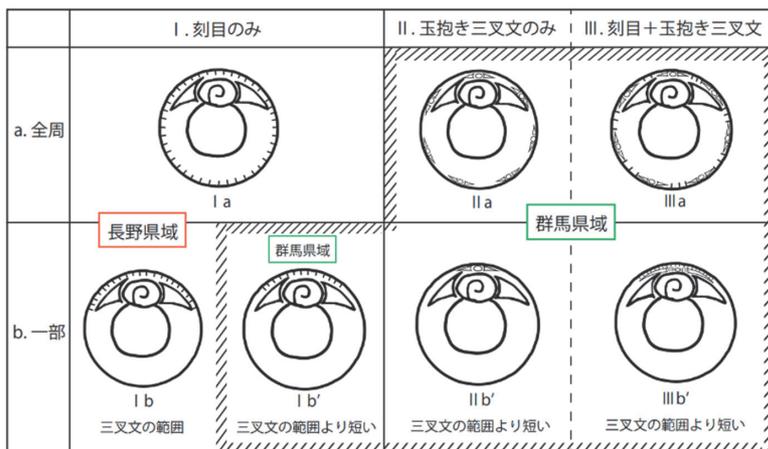


図9 一単位系列耳飾の周縁部の細分模式図 (筆者作成)

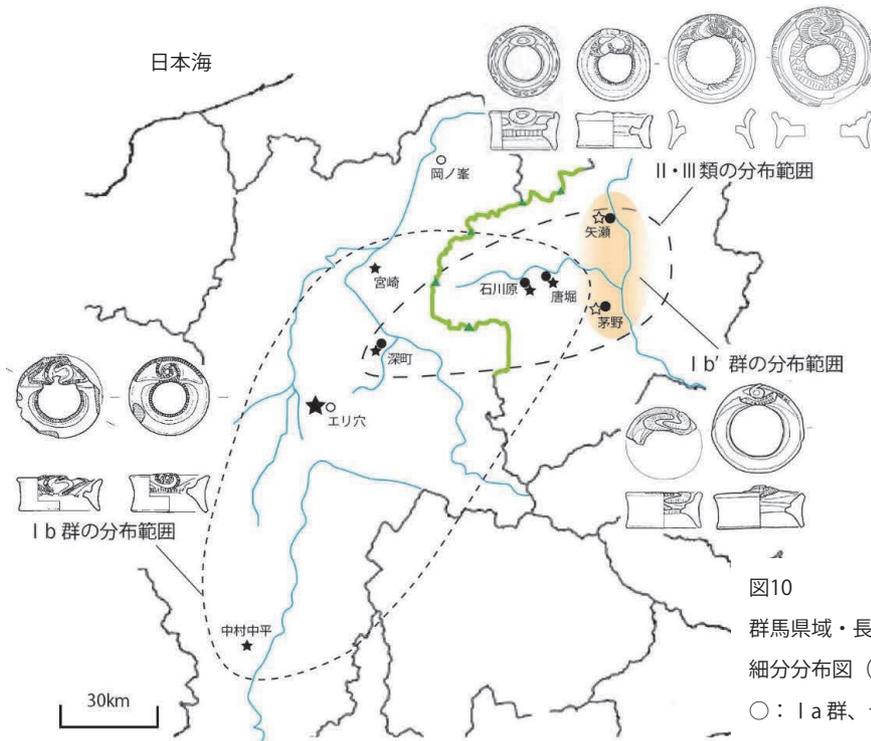


図10 群馬県域・長野県域の一単位系列耳飾の周縁部の細分分布図（筆者作成）
○：I a群、★：I b群、☆：I b' 群、●：II・III類

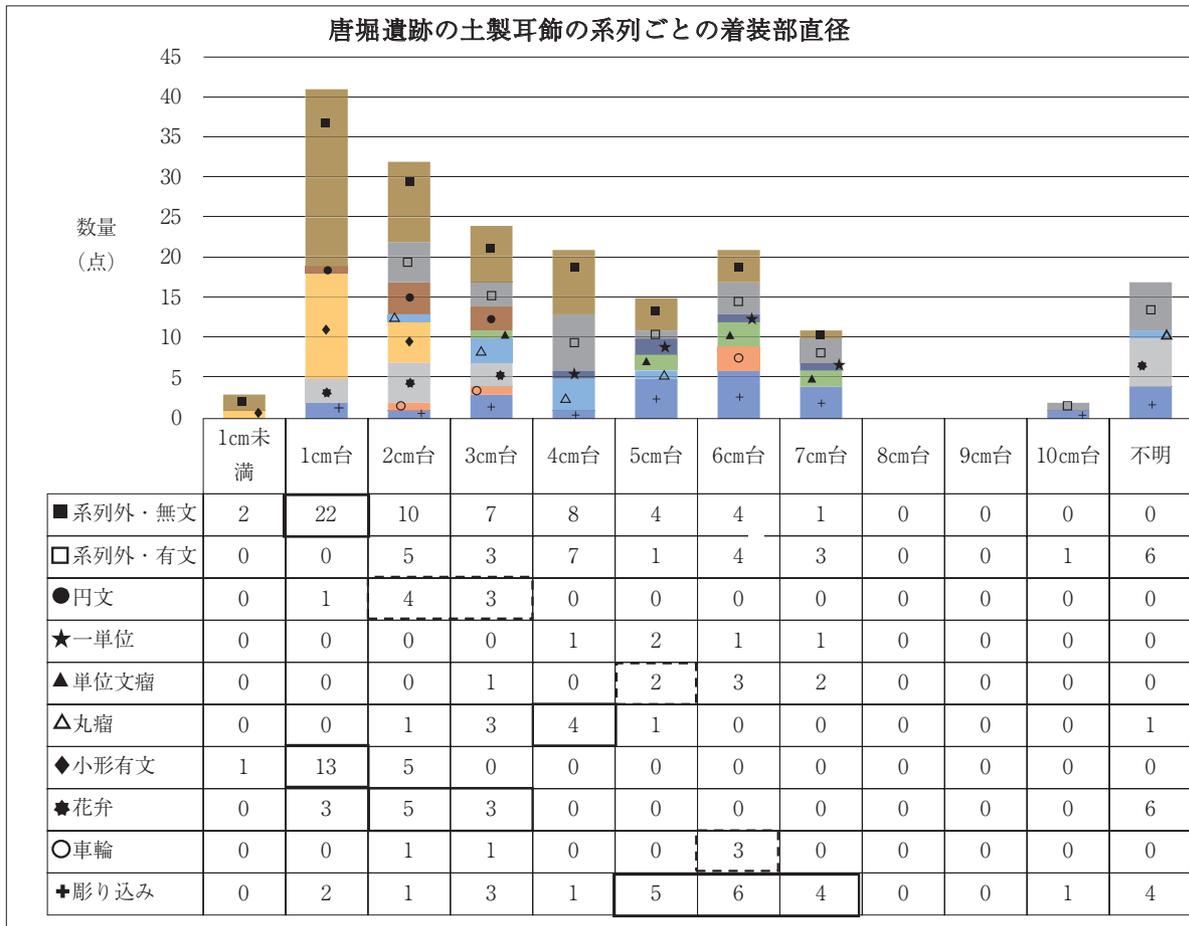


図11 唐堀遺跡の土製耳飾の系列ごとの着装部直径（報告書掲載のみ） □ 唐堀集団の系列、▨ 他からの集団が用いた系列

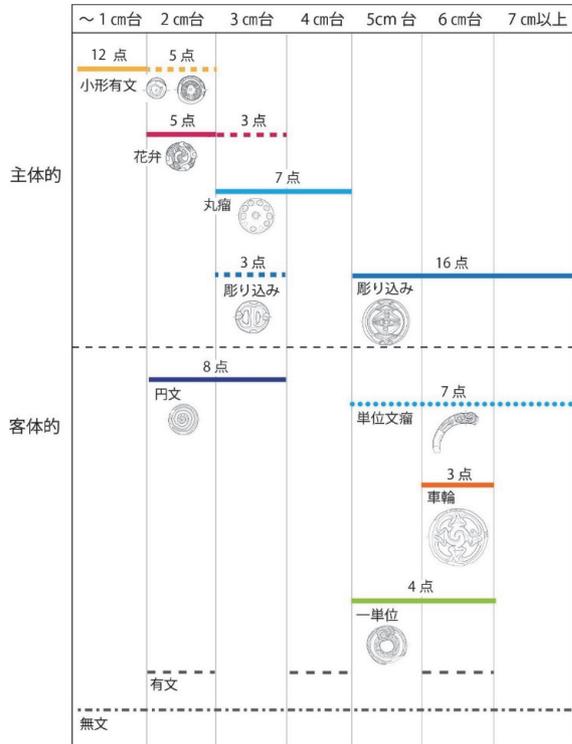


図12 唐堀遺跡の土製耳飾の各系列と付け替え段階の想定図

表1 唐堀遺跡の土製耳飾の系列分類表 (筆者作成)

系列	各系列の特徴
彫り込み系列	中央の橋状の削り出しを「ブリッジ」という。ブリッジ中央やブリッジの付け根部に、「S」字状や波状、玉抱き三叉文を施す。時期幅は、後期後半から晩期前半である。
車輪系列	「U」字状モチーフを3つまたは4つ等間隔に配置し、中央孔を有するものや内部に十字状の透かし彫りを施す。「U」字状モチーフ開弧部の間を透かし彫りするものは新相である。彫り込み系列との相互影響が強い。時期幅は、後期末から晩期前半である。
花卉系列	花卉のような立体的な透かし彫りを施す。小形品は、内部の文様が「カニのツメ」や風車を呈し、肩部文様帯に刻目や玉抱き三叉文を施す。大形品は、群馬県千網谷戸遺跡に代表されるように、表面部直径と裏面部直径の差が大きい。大小とも胎土は緻密である。時間幅は、後期末から晩期前半である。
小形有文系列	表面部直径が1~2cm台で、中央に突起を有し、そこから放射線状に刻目を施す。表面に沈線で円を描いた簡素なものから、周縁部文様帯に刻目を全周させるものもある。時期幅は、後期後半から晩期前半にかけてであり、放射線状の刻目はやや新しい。
瘤系列	粘土を丸めたものや、それにキザミを入れたものを、中央あるいはその周囲に配置する。また、ハート形や三角形のモチーフを配置し、その間を粘土紐でつなく。貼り付けの技法で装飾する。後期後半が主体であり、丸瘤にキザミを入れたものは安行2式とされる。
一単位系列	玉抱き三叉文を基本とした主要文様を1つ配置する。玉抱き三叉文の「玉」部分は「S」字状や入組文、工字状モチーフに代わる。時期は、後期後半から晩期前半である。精製品は胎土が緻密で花卉系列に近く、主要文様が立体的となり、肩部文様帯と内面刻目帯を持つ。ピークは晩期前半である。
円文系列	充填した臼形や裏面が凹状を呈し、表面に沈線で渦巻文や同心円文を施す。4つの半円を外向きに配するものがあり、沈線で描いた円文の間に刺突や刻目を施すものもある。時期は、後期後半から晩期前半である。
系列外・有文	上記系列に含まれないもの。破片で判別不明なものを含む。またこれまで「粗製文様系列」とされてきた曖昧なものも該当する可能性がある。今回は、内面刻目帯のみをもつ耳飾に着目する。
系列外・無文	文様が施されないもの。小形品から大形品まで幅広く、無文だが赤彩が施される場合もある。

※角田 (2000,2021)、吉田 (2004)、吉岡 (2019) を参考にし、主に唐堀遺跡の土製耳飾に対応させて作成した。なお、時期幅は茅野遺跡報告書 (角田2021) に基づき目安として掲載しており、唐堀遺跡の時期幅ではない。

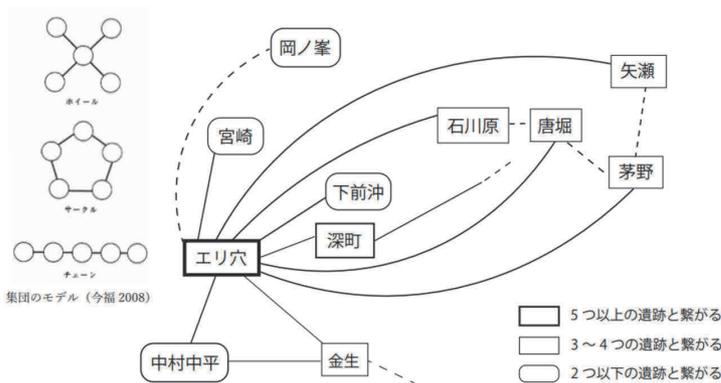


図13 今福 (2008) の土器の集団モデルを耳飾に応用した遺跡間関係模式図

表2 群馬県唐堀遺跡と長野県エリ穴遺跡における各系列の数量比較

遺跡	小形有文	花卉	円文	彫り込み	車輪	丸瘤	単位瘤	出土総数
唐堀	19	103	8	63	6	23	17	688
エリ穴	36	26	24	24	19	7	207	2643